

「平和ボケ、したわが国大方の予想を裏切って突如火を噴いた中越戦争も、大勢としては中国の撤退宣言などで終息の方向に向かっているようだ。今度の紛争の特質をズバリ表現すれば、中国、ソ連、ベトナム、カンボジアといった社会主義国同士の、陰陽両面にわたる「覇権争い」ということではないか。果たして、今回の紛争で得をしたあるいは損したのはどこか、日米も絡めてバランスシート(損得勘定)はナンと出たか。東京外大教授中嶋嶺雄氏に、単刀直入うかがった。
(聞き手は堀内本誌編集長)

異端者への制裁論理が

まかり通った

陰湿宗教戦争

中越戦争の バランスシートを見る

社会主義国家間の
覇権の連鎖だ

——問題をすつきりさせる意味で、ま
ず今回の中越戦争の基本的な性格をどう
いうふうに、とらえたいのか、お話
しいただきたい。

中嶋 いまご指摘のように、今回の紛
争は、いわゆるアジアの社会主義国間
の紛争なんですけれども、いわば社会
主義国そのものに紛争処理のルール

がない。しかも自分のところが正しいと
いう自己正当化をし、相手を異端者だと
見るわけで、結局「宗教戦争」と同じだ
ろうと思うんです。

異端者であれば、相手に対して何をし
てもいいという制裁の論理というのは、
まさにその辺から来ると思うんです。こ
こに今回の問題の深刻さがあるという気
がします。

それは言ってみれば、お互いに覇権主

知的国際関係の形成こそ日本生存の戦略だ



正義という名のもとで火を噴く砲口 (左がベトナム軍)



大型特集



中嶋謙雄氏

義、覇権行為ということで競い合っている、そういう覇権の連鎖関係というものが出てきているということだと思えます。

それから二番目には、本来、国境問題、社会主義がまさに勝利したプロレタリアートは、国境にこだわるべきではない、というレーニンの原則というものが、空文化している実態を見せつけられたわけですね。社会主義というのは、インタナショナルイズムみたいなものに対する変な信仰があるだけに、自分たちはインタナショナルであるけれど、相手はそうではないんだという意識が働きますね。ここと同じ紛争でも、自由世界の中の紛争とは全く違うパターンが見えてくる。

それから三つ目の重要な問題は、どうも最近の社会主義というのは、軍事に対して「過信」があるのではないか。つまり力を持つことは即発言力を持つこと、自分の立場を正当化するため、即軍事に走るという傾向ですね。

——さて、中国が突然そういった軍事行動に走ったのは、ソ連、ベトナムが描いているとみられるインドシナ連邦とい

う基本構図へのけん制では……。

中嶋 よく言われるインドシナ連邦構想みたいなもの。これは、ベトナムが中心になって、インドシナを固めたいという意識が非常にあったと思います。それが中国を非常にいらだたせた。中国というのは、昔から自己中心的なところがありますからね。

そして朝鮮半島にしてもインドシナ半島にしても、中国の周辺領域だという意識があるわけです。その周辺領域自身が非常に主体性を持ち始めたということですね。これはやっぱり中国をいらだたせ、昨年春からの中越の国境問題、華僑問題をめぐる衝突になって、ベトナムを

たいたわけです。

だ、国境問題も華僑問題も、これはいまに始まった問題ではない。そこにはいわず中越間という歴史的な古い関係、アジア的な階層秩序みたいなものがあると思うんですね。

今回も鄧小平副首相（総参謀長）の意識の中には「たかがベトナムぐらいいい」「ベトナムが」という気持ちが出てくるような気がしますね。

——その大国意識と、あと囲い込みといいますが、インドシナがああやってドミノとまではいきませんけれども、ベトナム、その背後のソ連の影響下に入るのではという焦りも出てきたと。

中嶋 そうですね。それがさっき言った社会主義のいろいろな正当化にかぶさるから余計、という気がしますね。

鄧小平路線固まる 「覇権」ポロ出したが

——それでは次に移って。とりあえず中国ですが、場合によっては侵略者のレッテルを張られることも覚悟して、この行動に出たと思うんですが、それは鄧小平氏の訪米とか昨年八月の日中平和友好

条約にもさかのぼれば、いわゆる日中、米中というアンタント（協商関係）みたいなものがあるんでは……。ともあれ中国が得たもの失ったものといえはようになりますか。

中嶋 これは一般的には、日本の新聞その他もよく指摘しているように、中国は大変むちゃくちゃなことをやっただと。中国に対する世論が非常に硬化していますね。

だれが見ても、中国自身が大量の軍隊で国境を越えて侵略したわけですから、軍事的に見ても、国際政治の上でも確かにヘマをやった。ただ、中国自身がそういう形で受けとめているかどうかとなると別問題ではないでしょうか。

中国自身はとにかくベトナム制裁ということを言って、言ったことをその通りやっただけです。まさに「中国外交の勝利」であるというのを、少なくとも鄧小平氏自身は国内で言い得ると思うんですね。

国際世論が中国に敵しいといっても、それは中国国内の人たちには伝わらない

3月27日号
350円
時事通信社

世界週報

光さすか米ソ

関係

自制心で
相互の利益追求
佐藤 睦

供給窮迫と値上げ旋風づく

イラン石油輸出混乱の後遺症
杉田知裕

対米追従から非同盟外交に転換

緊迫する中東情勢とサウジアラビア
小島 直

基盤不安定で前途多難

無人数政支配権移行するロシア
長浜孝行

（書店で金曜日発売）年間購読は03（五九）二二二〇

わけですし。

——そうですね。

中嶋 ですから、ここが実は大きな問題だと思わぬですね。

今回のベトナム制裁は外からみるかぎり、中国にとって利が少ないことをやっているわけですけど、これはどうも過去数カ月、中国国内には鄧小平氏が内政的には四つの現代化という国家目標と、そして対外的にはいわゆる反覇権、反ソという世界戦略を掲げて、非常に勢いづいてきているという状況がある。

その勢いづいた鄧小平氏が十二月の三中全会では華国鋒、汪東興、陳錫聯、吳



中国共産党第11期第3回中央委員総会の
華主席（右）と鄧副主席

徳という、いわゆる文革右派、つまり毛沢東のいわば側近であった、しかしながら文革左派の四人組とは違った連中を、自己批判に追いやって、人事の上では完全に鄧小平系列、あるいは周恩来系列、あるいは旧実権派といってもいい、全部そういうもので固めちゃったわけですね。

それはまた同時に、鄧小平氏としては国内で大変な政治的なカケというか、非常にデッドヒートした状況があつて行われたわけです。そのことを示しているのが、あの十一月中旬の壁新聞ですよね、毛沢東をすごく批判した。毛沢東を専制

暴君視、現代の始皇帝とまで言つて批判した壁新聞が出た。そういう内部的な葛藤を経て、いまの鄧小平氏というのが出てきたわけですね。鄧小平氏としては訪米、訪日を果たして、かなり勢いづいてると思うんです。

——それが今回の起爆剤に……。

中嶋 勢いづいて制裁に出た中国は、少なくとも鄧小平路線というものは「大変な失敗をやった、へまをやったじゃないか、だから鄧小平はあぶないんじゃないか」という質問をよく受けるんですが、私は逆に、中国はこれでもつてむしろ鄧小平路線をより一層固めようとするんじゃないかという気がするんですね。その意味で中国にとって、そのバランスシートはプラスであつたこと。

それからもう一つは、中国は言うことをそのままやるんだということを示したことです。

——有言実行したことで、インドシナに対する軍事的ならみとか中国の威信というものはある程度確保したと——。

中嶋 ええ、自己評価はそうでしょうね。

ただ、外の国が逆に中国の思い通りになるかという点、今度はむしろ、中国にくつつくと危険だという傾向で、中国離れが進むでしょうね。

——ですから、国際的に言うると、反覇権というニシキのみ旗が一つつぶれたと。

中嶋 そういうことは言えますね。

しかも、これも日本とアメリカからという、さっき言われた米、日、中というアンタント、私はこれをコワリション（提携、連合）とも呼ぶんですが、そういう太平洋横断的連携という一つの座標軸から見れば、中国の行動は評価できても、アジアの方から見ると、中国自身が覇権であり、大国主義じゃないかということ、アジアの周辺は感じますね。これは彼らは潜在的にもともとそういう見方をしていましたからね。そのことを証明したということです。

カンボジア侵入「相殺」 得したベトナム

——次にベトナムとソ連を一緒にしていかどうか分かりませんが、今度はそ

ちらのバランスシートを……。

中嶋 ベトナムから見ますと、中国とは逆で、対外的には得をしましたね。ベトナムのカンボジア侵入という事実が相殺されたということですね。そして、やっぱり中国という大国が、ベトナムを、強いものが弱いものを、侵したというところに対するある種の同情みたいなものが生まれたわけです。それから国際世論に対する働きかけもベトナムは非常にうまくいったと思います。

しかも、戦略的に見ても——これは一説によると、鄧小平氏がすでにワシントンで今回の作戦についてアメリカ側に漏らしたんじゃないか、そして、ワシントンはそれをモスクワに伝えたではないか、モスクワはそれをハノイに伝えた、そのことによって、ハノイは事前に中国の軍事行動を察知していた。したがって正規軍は全部国境から下げておいて——中国が越境してきて、そこにはほとんどだれもいないような状況をつくっておいたのではないかというふうな見方もあるくらいですね。
それは事実かどうか、私は判定する材



ベトナムに投降したカンボジア兵

料はないんですが、かなり確度の高い情報としてそういうこともあり得ると。それは今日の国際関係ではあり得ることです。お互いに貸し借りをくり合っているような、国際関係のバランスがあまりまずからね。

そうしますと、その意味ではベトナムは実際には傷は少なかったんじゃないですか。

ただ問題は、ではベトナムにとってマインスははないかというと、中越間というベトナムにとつての二国間関係をどうとみますと、今後長期的には中国からいろいろないやがらせをされるでしょうね。

実は今回中国は撤兵という形はいいけど、軍事的には逃げる、敗北したような格好になりましたから……。

それからもう一つは、ソ連に全面的に依存せざるを得ない体制があるということですね。そのために、ソ連の影嚮下に入らざるを得ない。

これは、いまの状況では、ベトナムはそのことを自ら欲していると思えますけれど、ベトナム人が本心でソ連の影嚮下に入ろうとしているのかというと、私はそうではないという気がしますね。

軍事評論家ではないですが、純軍事的に見ると、中国人民解放軍よりも、むしろベトナムの方が強いという状況を一般的には印象づけたと思います。

そのことは、東南アジアに対してはにらみが効く。このことによって、今後の東南アジアはベトナムを抜きにしては語れなくなりましたね。

そういう状況の中で、カンボジアに対してもベトナムの影響力は非常に強くなりましたから、実際には今後、一種のベトナム、カンボジア連合ができるわけですね。そのことによって、たとえば食糧



中嶋氏に話を聞く堀内本誌編集長

ことを、きちんと表明して初めて、全方位外交というものが主体性を持つ。そしてそのことによって、日本のいわば外交的座標軸が拡大され、ソ連に対しても言うべきことが言えるわけですね。

——最後になりますが、大体社会主義国家というのは「平和愛好国」であって、戦争なんかやらないんだというような、いわば平和ボケした所論をしている連中もおります。そこでもう少し国際政治の冷徹な力学というものを、もっと理解すべきだと思うんですが。日本国民は外交オンチとか本質的にだめなんですか。

中嶋 まあ、そうは思いたくないですね。つまりそういうふうになれば、今後の日本の生存そのものが脅かされると思うんですね。私はいまは非常に大きな転換期だと思えます。転換期というのはいつの時代にも言えるわけですけど、考えてみると、これから一九八〇年代を迎えるんですが、これまでの戦後三十五年間というものはいわばヤルタ、ポツダム体制というものが何らかの形で一つの座標軸をつくってきた。中ソ友好同盟条約なども三十年の期限を近く満了することになります。これはヤルタ・システムの申し子としてできたものです。それにも明らかなように、現代史の一つのワケ組みが崩れるわけですね。

まさに新しい時代を迎えようとしている転換期は、この間のいろんな教訓を日本人がくみ取って、日本の生存の戦略というのには、いわば外交的な知恵を働かしていくということの中にしかないと思うんです。つまり知的国際関係の形成ということです。それはやっぱり状況を非常にリアルに見ていくということだと思っております。そのことは決して日本自身が

パワーゲームの中に加わるということではない。日本は加われないわけですから。

——そうですね。

中嶋 加われない場合に何をするかというのと、やっぱりそういうストラテジック（戦略的）な、知的な国際関係の形成というのは、言ってみればストラテジックな対外関係の形成をしていくということとでその必要がありますね。それを非常に情緒的に、エモーショナルに考えて、それから非常にウエットに、おっしゃったように、社会主義は平和国家だという信仰の中で、安閑としていますと、大変危険が多い。

つまり、いまの社会主義の問題というのは、日本が社会主義ではないから安心だということではないと思うんです。対岸の火災視し得ない問題があるわけですね。もし中ソ戦争が起ったらどうなるのか。ソ連がどんどん東南アジアへ出てきたら、日本は一体どうなるのか。そのこと一つ考えただけでも大変な問題を含んでいるわけで、その点はいま日本自身が大きな歴史的な「踏み絵」を突きつけられているんだという気がしますね。

佐々隆三の
人生漂泊

連載—135



画/市野英樹

●なりふりかまわず

三月は、のんびりするつもりだったが、もうもいかず、ドタバタ走り回っている。なにしろ税金の、確定申告の月でもある。ことさらに言いたるほど、税金を払っているわけではないけれども、申告洩れがあったは一大事と思ひ、一件五千円の原稿料、三千円のコメント料の類まで、いちいち細かく並べ、税理士さんのところへ持参した。これでもって、提出用の書類を作製してもらうのだが、なにやら医師の診断書を持つ心境で、スリル満点であった。他人様から、「働きすぎじゃないか」と注意されることがある。改めて、わが収入の明細をみると、薄利多売主義であることに気づく。だから当分は、ひたすら原稿を書くのを、試験と思うべきだろう。それで世間から見棄てられるか、物書きのはしくれとみなしてもらえるか、おのずから決まる。

今は修業中と思えば、税金は月謝のようなもので、払うのが苦になるはずもない。いや、まったくモノは考えようで、今年は珍しく素直な気持ちで、早目に確定申告を終えた。そのあと、二泊三日の取材旅行で、大阪—広島—香川を回って、われながら快調であった。なにしろタクシーをふくめると、乗り物に乗っている時間が、長いのである。家へ帰って風呂に浸かると、ふわふわと波間にただよっている感じで、これはまあ、水の中だから当然と思つたが、ベッドへ行つてからも、ずっと揺れている。ウトウト浅い眠りで、朝になつて起きようとしたら、背骨が突っ張つてまるで自分が一本の棒になつたかのようなのだ。これはムリをしすぎた、しくじつた。後悔しながらも、寝ているほかない。こんなときにかぎって、また、電話がよくかかる。べしかも仕事の催促その他、お叱りが多い。ベッドに寝たまま、哀れな声を出しながら、一事が万事この調子で、いつたいオレはどうなるのかと、お先真っ暗の心境になる。せつか

く張り切つて旅行に出かけたというのに、このざまなのだ。

ウンウンうなつてしていると、これまた難題がもちあがる。留守中にひらかれた、町の自治会の会合で、わたしが副会長に推せんされているというのだ。自治会は、団地の百四十三世帯の全員が入会し、さまざまなトラブルをかかえこみながら、運営されている。この夏になれば、わが家も満三年になるのだ。古い順番から、役員になる不文律だとか。こちらだつて世話になっているのだから、「多忙ですからご勘弁を」と言えるはずもない。いったい、どんな役目が待っているのか見当がつかぬまま、引き受けることにしたが、はたしてつとまるものやら……。

けつきよく夕方になつても、体は不調である。明後日からは、石垣島へ四泊五日の取材旅行で、その前に書かねばならぬ原稿がおよそ五十数枚。気は焦るけれど、どうなるものでもない。だが石垣島から帰つたら、中一日おいて、こんどはフィリピン行きである。

危機を打開するとか、米のよくとれる例のデルタ地帯……。

——メコンデルタ。

中嶋 それを吸収するとか、いろんなメリットがあつたわけです。機会を与えられたと、考えているんじゃないでしょうか。

ソ連の世界戦略には 呼び水だった

それからソ連なんです、実は一番喜んだのはやっぱりソ連だと思います。今回見てみますと、ソ連は実際にはベトナム支援の姿勢を示し、中国を批判し、そして、軍事的には全面的に支援したけれど、これが中ソ戦争に発展することを抑制しようとしてかなり慎重だったと思うんです。

それで、国際世論はどう見ていたかという、ベトナムはカンボジアをたたく、中国がベトナムをたたく、これでソ連が今度は中国をたたくのではないかと。こうなれば大変深刻な状況で、いわば逆下ミノですね。そういう形になるんじゃないかと思っていたんですけど、そ

れをしなかったということですね。ソ連は、そのことを十分計算に入れて、言葉の上ではかなり激しいことを言いながらも、実際には慎重であり、逆に中ソ国境地帯では、どうも状況がかなり緩和していたのではないかという気がします。

そして、時間がたてばたつほど、ソ連は有利になる。もちろんここで中国をたたくようなことをすれば、せっかくのソ連の有利な立場を失うということ、慎重になった。むしろソ連の大きな戦略はやはりなんといつても、ブレジネフ・ドクトリンに基づくアジア戦略を進めることです。非常にウ回的に、むしろ東南アジア、インドシナ半島に拠点をつくることによって、今後の世界戦略を考えようとしたわけです。直接中国を威圧することを、非常に抑制したということですね。

その一番いい証拠は、二月下旬から三月上旬にかけて、中越戦争が激化し、中ソ関係が一般的には険悪化していると思われた状況の中で、中ソ国境の河川の航行をめぐる中ソ会談が事務レベルで開かれ、それが久しぶりに非常に順調に進ん

でいたということですね。これはAFP Ⅱ時事電が伝えていますけれど、これは非常に注目すべきことである。そういう意味でも、ソ連というのは国内的には何も傷つきませんし、ソ連の世界戦略に与っては、まさに呼び水を出してくれたようなものです。そしてまた、長期的に見れば、結局は中国は何か、かんか言っても、ソ連にはタテつけないんだ、ベトナムの背景にソ連がいるということで、大きくソ連の力というものを示しましたね。中東ではイラン、アジアではベトナムというところで、非常に状況が流動化したことが、ソ連としてはむしろ非常に有利だと。まさに状況は我にとって利ありと読んでいるんじゃないでしょうか。

それに対して、アメリカはといえば、カーター外交というのは、まさに大きな破たんを示しましたね。何もなすべがなかった。アメリカの威信は非常に後退したわけです。

逆にイランもそうです。変にカーター外交、道義外交、人権外交の考え方が登場して、カーターは非常にかっこよかつ

たんですけど、最近はおちこちでポロを出している。そのことを結局アジアの諸国に知らしめた。もうアメリカには頼れないという気持ちでしょうね。

アジアの流動化 日中条約に根因

実はここでやっばり日本の立場というのは、非常に重要だと思わすね。東南アジア諸国にしても、中国にしても、つまりアジアの中で軍事的には大きなパワーでないけれども、政治的、経済的に大きな発言力を持ち得る日本に対する期待は非常に大きかったわけです。

そうであるだけに、われわれはまず第一に、今日のアジアの情勢の厳しさに對してある種の緊張感を持って、責任感を持って、対応すべきだと思わすね。

考えてみると、今回のこういう非常に流動的な状況をつくった原因は、私は実は極言すれば日本にあった。つまり、日本が日中条約をああいり形で選択したわけでしょう。

——ええ。

中嶋 それはわれわれは日中間だけで

見ていたから、何か非常に結構づくめでおめでたいことであるかのようなふん囲気がありましたけれど、日中の選択というものがいかにベトナムをいらだたせたか。つまりベトナムは中国から援助を打ち切れ、中国から攻撃されていたわけですね。そこへ日本の、特に財界が中国にワツとラッシュしていく。四つの現代化というのは、日本にとっては飛びつくべき材料であったかもしれないけれどもベトナムからすれば、これはもう中国の富国強兵策である、軍事的増強であると。ですから、単に覇権をめぐるアジアの国際関係のなかで日中が結びついたというこのみならず、やはり四つの現代化という富国強兵策の背後に、日本の経済力がついてきた。これは非常にこわいという感じをベトナムが抱いたのは当然であって、その結果ソ越条約が生まれたでしょう。

——昨年十一月三日でした。

中嶋 つまりベトナムはそういう状況の中で、耐えられなくなつて、ソ連に頼っていったわけです。

そして、ソ越条約があつたからこそ、

ベトナムは非常に高飛車に、今度は勇気づけられて、カンボジアに出ていったわけです。あの時にソ越条約がなければ、カンボジアへ出ていかれなかった。そのことが結局、今回の事態をもたらしているとする、やっばりアジアの流動化に對する日本の責任という問題はあると思わすね。日本外交の選択という意味で、やっばり日本人というものは、自分の選択の持つ意味の大きさ、それがいかに今日のアジアでは、現状変更的なものか、いわばそれ自体が国際関係、つまり日中二国間で済まない問題ということ、どこまで認識していたかという大きな「踏み絵」を突きつけられている。

大きな歴史的「踏み絵」 の前の日本人

そこで、全方位外交とは何かということなんですけれども、本来そういう状況の中で「いやそうではない。日本は全方位外交だ」と言うならば、今回のような事態に對して、日本はやっばり言うべきことはきちんと言っておかなければいけないからではないかと。そのぐらいの